

菊池寛と1920年代の神戸（その3）

1928・1929年の「大阪朝日新聞 神戸版」を資料として

箕野 聡子

1、はじめに

「大阪朝日新聞 神戸版」¹とは、「大阪朝日新聞」の地方版である。この地方版の紙面には神戸、阪神地方の情報が載せられ、記者が読者を巻き込みながら、地域の活性化を図った形跡が見られる。

例えば、1920年代の菊池寛に関する項目を調べていくと、1925年以降には、神戸での映画上映についての多くの記述が見つかる。その始まりは、1925年8月に毎日新聞社を退社した菊池が、「東京・大阪朝日新聞」両紙に連載した²小説「第二の接吻」の映画化である。この作品は、連合映画芸術家協会³と日活と松竹の三社によって競作され、異なる監督、異なる俳優により三様の作品が生まれるといった異例のものであった。これらは神戸でも上映され⁴、朝日新聞神戸販売所は、神戸新開地の各上映館と交渉し、新聞読者に優待券を配布して観客動員を活性化させようとした。

神戸は1868年の開港以来、流入してきた西洋文化を様々な形で取り入れ、外国人居留地およ

び雑居地を中心に異文化との共生を果たしてきた。神戸モダニズム・阪神間モダニズムと呼ばれたこの独自の文化の研究は、早くから進んできたといえる。しかし、神戸はそれと共に、海港都市として、川崎造船所や三菱造船所を擁する重工業の担い手である労働者やその家族の生活の場としても発展し、彼らへの娯楽提供にも熱心であった。その結果、1920年代の神戸、特に新開地には、飲食店や百貨店、劇場とともに、映画館がひしめき合っ立ち並ぶことになる⁵。この劇場や映画館の情報を、「大阪朝日新聞」の「神戸版」（以下、「神戸版」とのみ記す）は細かく読者に伝えている。

本論は、後に初代大映社長に就任して日本の映画界を牽引し、文学を大衆に供給することに熱心であった菊池寛の作品に注目し、1928・1929年の「神戸版」に掲載された記事から、当時の神戸での劇場・映画作品の動向を調査する⁶。その中で、地方版という新聞メディアが、地域と文学との相互発展にどのような役割を果たしていかを考察したい。

¹ 1925年4月1日から「神戸附録」は「神戸版」と名が改められた。本論における「神戸版」とは、1940年までの地方版を対象にしている。

² 1925年7月30日から11月4日まで連載された。

³ 連合映画芸術家協会は、1925年に直木三十五が創設したもので、文芸部には菊池寛がいた。

⁴ 「第二の接吻」は、神戸新開地の二葉館、錦座、菊水館の三館で上映された。最も早かったのが、連合映画芸術家協会作品の二葉館での上映で1926年2月2日～6日である。日活大將軍作品は錦座で、松竹蒲田作品は菊水館で、1926年4月29日～5月5日（4月22日封切）に同時上映された。

⁵ 新開地には、劇場でもあった聚楽館をはじめ、主に洋画を上演する神戸松竹座（もと神戸松竹劇場）やキネマ倶楽部、さらに二葉館（マキノ系）、錦座（日活系）、菊水館（松竹系）などがあった。当時は神戸三宮より神戸新開地のほうに、人気の演芸が集まっていた。

⁶ 1920年代前半に関しては、拙稿「菊池寛と一九二〇年代の神戸 一九二〇年代前半の「大阪朝日新聞 神戸附録」を資料として」（『研究紀要』神戸海星女子学院大学、2018年1月）を、参照されたい。また、1926・1927年については、拙稿「菊池寛と一九二〇年代の神戸 一九二六・一九六七年の「大阪朝日新聞 神戸版」を資料として」（『文藝 もず』菊池寛記念館、2017年6月）を、参照されたい。

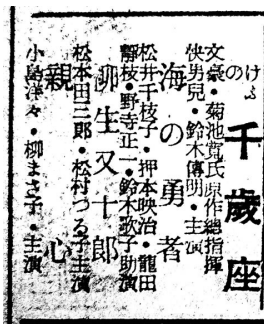
2. 「海の勇者」の興行不振

1928年1月には、菊池寛の二つの作品が神戸で公開された。一つは錦座において1月27日から2月13日まで上映された「結婚二重奏」(日活)である。前、後編に分かれていたが、合わせて14巻が同時上映されている。「結婚二重奏」は、「報知新聞」に1927年3月13日から7月16日にかけて連載された作品で、新聞連載の映画化としては「第二の接吻」の次の作品にあたる。主演は夏川静江であり、彼女は菊池寛の映画作品の常連となった。

もう一つの作品は1月27日から31日まで三宮の千歳座で上映された「海の勇者」(松竹)である。首都圏封切から、3カ月遅れての上映となった⁸。

「海の勇者」は、広告の告知文に「菊池寛氏原作総指揮」とあるように、菊池が文芸春秋社内に立ち上げた映画時代プロダクションの第1号製作作品であった⁹。文学作品を原作に持つ映画は、演出が原作に忠実であるか否かがしばしば話題となる。文芸春秋社は雑誌「映画時代」でシナリオを公開し¹⁰、原作との相違を明らかにして、原作の芸術性と、映画の進取性のそれぞれが守られるようにした。

無声映画でのシナリオであるから、形式は戯曲ではなく、弁士の説明内容に近く、現在でい



千歳座広告(「神戸版」
1928年1月27日)

⁷ 首都圏封切は1928年1月21日である。

⁸ 首都圏封切は1927年10月26日である。

⁹ 映画時代プロダクションの設立と「海の勇者」の興行については、志村三代子『映画人・菊池寛』(藤原書房、2013年)に詳しい。

¹⁰ 「映画時代」に菊池寛原作のシナリオが公開されるのは「海の勇者」が初めてではない。1926年10月号には、「受難華」のシナリオが公開されている。

うノベライズに近いものであったといえよう。この試みは、1930年になって春江堂から刊行されていくトーキー文庫シリーズに¹¹つながっていくと思われる。

「海の勇者」は、1916年7月に第4次「新思潮」に発表された戯曲である¹²。第4次「新思潮」に発表した菊池寛の初期戯曲の映画化は、「父帰る」¹³(松竹)に次いで2番目となった。

「父帰る」の映画上映は、「神戸版」の「演芸界」の記事によると、1927年4月8日から14日までで、上映館は菊水館であった¹⁴。当時としては珍しく、主演俳優が「突如来神」し、昼夜三回の舞台挨拶を行っている¹⁵。このような華々しい宣伝にもかかわらず、「神戸版」に「父帰る」の映画評は見当たらない。「海の勇者」も映画評はなく、共に上映期間も短い。

これまでに菊池は、女性を主人公とする大衆向けの映画を次々にヒットさせていた。1927年だけを見ても「新珠」(松竹)、「真珠夫人」(松竹)、「慈悲心鳥」(日活)がある。これらの作品に比べると、社会問題を正面から扱った「父帰る」や「海の勇者」の興行は芳しくない。舞台においては成功を収めたこれらの題材は、しかし当時の映画界では受け入れられず、神戸もまた、例外ではなかった。映画化の路線を女性向けのものとし、そこに時代を描き出そうとする菊池寛原作の映画の方向性は、次にやってくるトーキーの時代にも引き継がれていくことになる。

¹¹ トーキー文庫には、菊池寛原作のものでは、「明眸禍」(1930年1月)、「有憂華」(1931年5月)などがある。編者は映画研究会である。

¹² 「海の勇者」は、1923年4月に市村座で尾上菊五郎により舞台上演されている。

¹³ 原作戯曲「父帰る」は、「新思潮」の1917年1月号に発表された。

¹⁴ 首都圏封切は、1927年3月29日である。

¹⁵ 上映館の菊水館は4月10日の広告に、「花形俳優来る1!!!」として、主演4名の写真付きで、この日に昼夜三回の舞台挨拶を行うことを告知した。当日の記事であり、取材ができなかったのか、その時の様子を記す記事は翌日以降も掲載されていない。

3. 神戸におけるトーキーの始まり

トーキーとは、映像と音声同期した映画のことをいう。1920年前半、神戸において上演される映画は、トーキーではなく無声映画であり、活動弁士が上映ごとに内容を語っていた。トーキーの技術は、1920年代から海外で開発されていたが、商業的な長編映画に用いられるのは1927年にアメリカで公開された「ジャズ・シンガー」（ワーナー・ブラザーズ製作）が初めてだといわれている。しかしこれは、フィルムに音声録音されているものではなく、映画フィルムと別に音声レコードがあり、それらを同時に再生して同期させる（ヴァイタフォン方式）であった。

この頃、神戸で上映されていた菊池寛原作の映画が「東京行進曲」（日活）である。首都圏では5月31日が公開初日であったが、それに先行して京都新京極帝国館と大阪南地常盤座で公開された。そして神戸でも錦座で同じく5月25日から上映されたのである¹⁶。

神戸のトーキー事情¹⁷については、1929年5月28日の「神戸版」の「KINEMA MARKET」に、「神戸でもいよいよトーキー時代がやってくる」として記されている。「神戸松竹座が昨年



「KINEMA MARKET『東京行進曲』」
（「神戸版」1929年5月27日）

¹⁶ 「劇と映画」の欄に「錦座 二十五日より『東京行進曲』」の案内がある。（「神戸版」（1929年5月25日））

¹⁷ 東京では、1929年5月9日に、マルセル・シルヴァー監督の短篇トーキー「進軍」と「南国の唄」とが公開されたのが、トーキーの始まりとなった。

十二月からこの設備を計画し」、「機械をアメリカのパワー会社に注文」、これが到着したので「同社の技師ダイヤー氏指揮のもとに」設備に忙しいというのである。「動機はフィルム式とレコード式との兼ねるもので」あるが、「外国のやうに俳優の台詞を全部入れるオール・トーキーでは却つてわが国の観客には向かないとあつて篇中のよい音楽や歌曲、または天然自然物の調べとか、或は舞台効果のみを入れることになる」というのである¹⁸。

「東京行進曲」は、溝口健二監督が京都太秦撮影所で製作した映画で、日本初のトーキーとして上映する予定だった。そのため、日活宣伝部は、西城八十作詞、中山晋平作曲の映画小唄『東京行進曲』のレコード¹⁹を作った。この楽曲は、映画主題歌として作られた最初のものでされ、トーキー作品の成功が期待されたが、主役の夏川静江の病気などが原因で撮影が遅れ、トーキー化は断念された²⁰。

「東京行進曲」は、雑誌「キング」（大日本雄辯會講談社）に、1928年6月から1929年10月に発表された小説である。小説が完結する前

¹⁸ 日本語字幕が付されて日本公開された初めての映画は、「モロッコ」（アメリカ映画、1930年製作、スタンバーク監督）である。1931年に公開された。この時の様子は、横溝正史「悪魔の手毬唄」（「宝石」1957～1959年）において、神戸新開地で人気の活動弁士、青柳史郎が失職することになった理由として次のように語られている。

「パラマウントさんがあれではじめて、スーパー・インポーズちゅうのんをおやりになったんです。それまではトーキーはトーキーでも、音を小そうしておいて、やっぱり弁士が説明しとりましたんよ。それがあの『モロッコ』の大当たりでございまっしゃろう。パラマウントさんはいうにおよばず、ほかの会社もぞくぞくとスーパー・インポーズをお作りんさる。それで弁士ちゅう職業が完全にあがったりになってしまいましたん」

¹⁹ レコードは5月1日にビクターレコードから発売された。

²⁰ 菊池寛原作の映画のトーキー化は、これより一年遅れ、『勝敗』（松竹、1932年3月封切）、『時の氏神』（日活、1932年4月封切）となる。

に映画が封切られたため、結末が映画と小説とでは違う方向に進み、そのことでも話題を呼んだ。

「神戸版」では5月27日の「KINEMA MARKET」で梗概を紹介しているが、ここで既に主人公の重要な秘密までが明らかにされており、観客が小説を連載段階まで読み進んでいることがかなり意識されていることがわかる。「雑誌小説」、「主題歌レコード」「新聞広告」という、このメディアミクス戦略により、「東京行進曲」は大ヒットした。首都圏公開予定の31日に「神戸版」は、錦座の広告を載せているが、そこには「連日大入満員」「破るるが如き大喝采裡七日迄日延続映」の文字が並んでいる。この前評判は首都圏の観客動員にも大きな影響を与えたであろう。首都圏に先んじて関西で映画が上映される戦略は、これ以降もしばしば用いられた。

しかし、6月に入ると「神戸版」は、6月7日に予定された天皇行幸の記事で埋まっていく。神戸が予定している企画が次々と発表され、神戸港及び神戸全市の「大電飾」、「港内御巡航」、警察官警備などの予行練習が行われていることが連日の記事となった。これに伴い、関西大歌舞伎を上演していた八千代座は行幸当日を休演としている。錦座は「東京行進曲」の上映を6日までとし、代わって7日から13日迄、三宮俱樂部が上映²¹を引き継いだ。

三宮俱樂部上映中の6月20日に、アメリカのトーキー映画の試写会が神戸であったことが、「神戸版」に記されている。「発声映画 大好評 オリエンタルホテルで公開」の見出しで、「発声映画の日本紹介のため来朝し」、「東京、大阪で大好評を博したアメリカ、フオックス・ムービー、トーン会社の極東監督ロイド・ラーバス氏」が、鉄道省などの後援で、オリエンタル・ホテルにおいて「携帯のトーキー映画全部を公開した」というのである。内容は「田中首相の日米親善演説、ムソリーニ、ロイド・ジョージ、フーヴァ諸豪など内外知名政治家の獅子

²¹ 「劇と映画」(「神戸版」1929年6月1日)

吼」であり、「声調の明瞭さはラジオ以上というてもよい程で聴衆の賞賛を博し」たという。

そして6月13日には、「トーキー いよいよ二館で上映」の見出しで、神戸松竹座が20日から「ゲーリー・クーパー氏主演の『狼の唄』を上映する」ことが決まったと記した²²。



松竹座広告(「神戸版」1929年6月20日)

さらに加えてキネマ倶楽部も6月13日から19日迄、トーキーを上映する運びとなったことが記され、キネマ倶楽部も広告を掲載した。13日の「劇と映画」では、松竹座とキネマ倶楽部のトーキーの競争を「湊川先陣争ひ」と題して紹介している。なお両館ともすべてがトーキーとなったわけではなく、無声映画も同時に上映していた²³。しかし、これらトーキー映画上映後の評は「神戸版」には特に見当たらない。



キネマ倶楽部広告

(「神戸版」1929年6月13日)

²² トーキー「狼の唄」は音楽映画である。「神戸版」では、「発声映画ではあるがオーケストラの伴奏と歌声だけで科白はちつとも入っていない」と紹介されている。26日まで公開された。(「KINEMA MARKET」1929年6月20日)

²³ 6月14日「神戸版」では「劇と映画」の欄に「リーフオン式トーキー映画『楽しきジャズの集い』『田園情緒』上山草人の『世界に告ぐ』『タイグレス』」と書かれている。なお、上山草人は無声映画時代にハリウッドで活動していた俳優である。また、キネマ倶楽部は20日から別の作品を上映しているが、これらはすべて無声映画である。

4. 陰りを見せぬ無声映画の人気

トーキーが苦戦していた同じ頃、新開地の劇場八千代座では人形浄瑠璃文楽座公演（6月11日～16日）があった。13日「神戸版」には、八千代座が「満員御礼」をあげた広告がみられる。

伝統的に〈語り文化〉に親しんでいた国民性は、まだこの段階の音楽劇に近いトーキーには親しめなかったといえる。活動弁士の解説と楽隊の生演奏が人気を博していた映画館では、設備を入れ替えるのも難しかった。6月27日「神戸版」には早々と「トーキーが生んだ 労働争議 解説者の解雇から」の記事が取り上げられ、トーキー導入により職を失うことになるだろう活動弁士（解説者）の境遇が懸念された。

それに対し、菊池寛原作の無声映画上映の勢いは健在である。「東京行進曲」を上映していた三宮倶楽部は、自館の宣伝に「十三日限り」



聚楽館広告（「神戸版」
1929年6月13日）

の注意書きをつけしたが、13日には、今度は聚楽館で次の菊池寛原作作品の神戸での上映が決まっていた。聚楽館は、13日から、菊池寛原作「新女性鑑」（松竹、田中絹代主演）の予告編を上映したの

である。予告編が映画宣伝の広告に載ることは、珍しく、以後19日の上映初日までこの広告は掲載された²⁴。

次に上映された菊池寛作品は「不壊の白珠」（松竹）である。原作は「東京朝日新聞」・「大阪朝日新聞」に、1929年4月22日から9月6日まで連載されたものである。封切は1929年10月17日で、神戸では20日から聚楽館での公

開となった。18日の「神戸版」では、「映画となった『不壊の白珠』」と題して「本紙に連載された菊池寛氏作『不壊の白珠』がいかに現代の大衆の心を深く把握してゐるか窺われる、大衆心理の機微を捉へるに敏な映画界がこれを見逃すはずがない」として、「本紙の愛読者を優待する意味で聚楽館の半額観覧券を「本紙神戸版に刷り込み広くご利用を乞うことになった」ことを述べた。この半額券は、18日から最終上映日の30



優待券（「神戸版」
1929年6月18日）

日まで毎日紙上に刷り込まれた。この半額券の効果もあつてか、21日の「劇と映画」では、「不壊の白珠」が「異常な人気を呼び満員の盛況」であることを報じ、「神戸版」24日の「KINEMA MARKET」では、「『不壊の白珠』は封切以来その新しい内容と映画としての稀有な出来栄とにおいて連日大入り満員の大盛況とつゞき同館最近のレコードを示してゐる」と評価した。またこの「KINEMA MARKET」では、映画のプロローグとして合唱される西條八十作詞、中山晋平作曲の主題歌が、「哀調たつぷりのサキソホンの階律」で観客を酔わせているとして、その小唄の全歌詞を載せている。

無声映画であるから、当然この合唱は毎回生演奏となる。27日の「劇と映画」では、「プロローグの唄をいま聚楽館の舞台でうたつてゐる唄ひ手の一人に元大阪放送局のアナウンサーだった巽京子さんの妹がある」と「行届いた詮索」を行い、無声映画ゆえの楽しみをあげた。

「神戸版」26日の「KINEMA MARKET」では、「予定の興行期間たる一週間ではとても多数のファンの渴望に添ふことができないので断然三十日まで日のべすることとなった」ことを知らせた。そして、この映画が「大衆の胸に力強く響いた」理由を、監督、カメラ、主演の各スタ

²⁴ 首都圏の封切りは6月14日であった。また、聚楽館での上映期間は6月19日から25日であった。

一連の演技が「総合効果を与え」、「近代人の思想に感覚に傾向に最も鋭くアツピールしてゐるからだ」と評した。これらは無声映画であっても、芸術性は発声映画に勝るとも劣らないことを主張しているようにみえる。

5. 国産トーキーへの試行錯誤

だからといって、もちろん神戸の映画館がトーキーを諦めたわけではない。つぎの準備は着々と進んでいた。

映画配給のパラマウント社は、「狼の唄」に続いて「レッド・スキン」や「底抜け騒ぎ」などのトーキー作品を輸入し、それを次々に神戸松竹座が上映していった。神戸松竹座は観客動員を増やすために回数観覧券の発売を決め、広告を7月4日に載せる。これに対しキネマ倶楽部も、例年8月に行っていた二葉館、菊水館共通の回数券の発売を早めて行い対抗した²⁵。

さらに、二葉館は、6月29日より7月6日まで、連合映画芸術家協会と関わりが深かったマキノ省三が製作したオールトーキーの中編映画「戻り橋」を上映した。首都圏は7月5日公開であったので、これは神戸が先行しての上映である。7月1日「神戸版」の「劇と映画」には、「国産マキノオールトーキー『戻り橋』が呼物」と評された。

「戻り橋」は歌舞伎の「戻橋」に題材をとった渡辺綱の鬼女退治の話である。映画フィルムと音声レコードを同時に再生して同期させる



「KINEMA MARKET トーキー『戻り橋』」（「神戸版」1929年6月28日）

²⁵ キネマ倶楽部・二葉館・菊水館共通回数券は、好評で売り切れたため、第二回の発売を知らせる広告が7月8日に載せられた。

〈ヴァイタフォン方式〉であったため、設備その他の問題を乗り越えることが比較的やすかった。音響が良いとは言えず、この経験から日本では、本格的にフィルムに音を録音する方法が模索されて行く事になる。

フィルムに音を録音する方法はミナトーキーと呼ばれ、日本初の本格トーキー作品と呼ばれた長編映画作品は1931年公開の『マダムと女房』（松竹）とされる²⁶。1931年には、「モロッコ」（アメリカ映画、1930年製作、スタンバーク監督）が、初めて日本語字幕を付して公開され、この年は観客が本格的にトーキーを受け入れた年としての印象が強い。しかし、「神戸版」には、1929年すでにミナトーキー作品が公開されていたことを示す記事がある。

6. 発声映画「大尉の娘」と無声映画「明眸禍」

「大尉の娘」は、中内蝶二による戯曲で、無声映画として、1917年（小林商会）、1924年（松竹）、1927年（マキノ）と連続して製作されてきた話題作である。1922年には舞台化もされていて、1923年には水谷八重子が主演し話題となった。

1929年の発声映画（発声映画社製作）は、水谷八重子主演で製作され、11月15日封切となり、神戸でも錦座で公開された。「神戸版」は、11月14日に「フイルム・トーキー 大尉の娘」の見出しで、「珍しいわが国最初のフイルム・トーキー、日活トーキー第一回提供の『大尉の娘』はいよいよ十五日から錦座で封切られる」として、作品の梗概を紹介している。だが公開後、「大尉の娘」についての映画評は「神戸版」に見当たらない。また、封切を予告する14日の広告には「俄然！ 日のペ」の文字が躍るが、

²⁶ 日本における最初のトーキーは小山内薫の「黎明」（1927年）とも言われるが、皆川式（ミナトーキー）を試すもので、実験的上映しかされず、商業的上映はされなかった。

21日の「神戸版」の「劇と映画」では、22日からの錦座上映演目変更が伝えられている。「大尉の娘」が、日本初のミナトーキーとして名を残さなかった理由を新聞紙上から考察することは出来ない。しかし、大きな話題とならずに上映を終えてしまったことは推測できる。



「大阪朝日新聞」夕刊（1929年11月14日）

トーキーへの積極性を見せた日活に対して、あくまで無声映画にこだわったのが松竹である。松竹が、「大尉の娘」に対抗して同日に封切ったのが菊池寛原作の「明眸禍」であった。「明眸禍」は、雑誌「婦人界」に1928年1月号から1929年10月号まで連載された長編小説である。連載終了直後の11月に、栗島すみ子主演で映画化された²⁷。上映館は、1929年8月から松竹経営となった聚楽館であった。1,200もの座席を持つ聚楽館であるが、21日の広告で「満員

²⁷ 映画が封切られた1929年11月に、「明眸禍」は、水谷八重子主演で新橋演舞場の舞台にかけられていた。こちらは好評を得て再演を重ねている。水谷八重子が「明眸禍」を初演したのは、1929年3月（市村座）であり、この時はまだ小説連載は終わっていない。関西では、1929年6月に、大阪中座で「明眸禍」を公演している。1928年前後の講演記録を記した『筋書 芸術座 水谷八重子一派』（ウテナ本舗宣伝部、1930年4月）に、水谷八重子の当たり役として、「大尉の娘」の露子とともに「明眸禍」の珠子があがっていることをみれば、舞台演目としては、どちらの作品も大きな成果をあげているといえる。

御礼」を出し、「見逃して悔ゆる勿れ」と翌日22日までの公開を知らせた。

「明眸禍」についても、公開後の映画評は見られない。この間も神戸松竹座では、洋画のトーキーが無声映画とともにかけ続けられ、次第に「KINEMA MARKET」でも新着洋画を中心に映画紹介するようになってきた。本格的なトーキーの導入を前に、観客の支持が微妙な変化を見せ始めてきたのが、1929年末の神戸の映画界であったといえるであろう。

7. 「明眸禍」と神戸



映画研究会編集「松竹特作 菊池寛原作 明眸禍」
（春江堂、1930年1月）

松竹の「明眸禍」はシナリオをトーキー文庫として売り出した。これは戯曲で書かれたものではなく、弁士が語る解説本に近いものである。冒頭には主題歌の詞があげられ、映画の画面の流れに忠実にストーリーが進むよう工夫がされている。これを解説本とせずにトーキー文庫としたあたりに、これからの映画事情を見据えた製作者側の方向性をみることができる。

ヒロイン珠子が京都出身であり、結婚してからも新居を神戸におくため、このトーキー文庫でも物語前半の会話部分には関西弁が多く使われている²⁸。結婚式は神戸オリエンタル・ホテルで行われ、新婚夫婦は神戸郊外の「ゴルフリンク」でゴルフを楽しむ。夫の従弟（原作では弟）が夕刊の「神戸実業界新人月旦」に載るなど、神戸の様子が盛り込まれる。

原作では、神戸の風景描写はさらに多く、具体的に記されている。珠子の一度目の見合い場所は、松竹座の活動であり、彼女らは第一幕の喜劇を観たあと、アメリカ物の悲劇を観ている。二度目の見合いの後の結婚式は、神戸オリエンタル・ホテルであり、新婚夫婦は宝塚へ行き、六甲のゴルフ場へ行く。そして、夫の弟が「神港実業界の新人」として載る新聞は「大阪朝日の神戸版」である。

「大阪朝日の神戸版」に「神港実業界の新人」のコーナーはない。しかし、1928年1月3日に「婦人ゴルフアー」の見出しで、神戸で「ゴルフの競技は社交婦人の一要素となつて了つた」という記事と、それにまつわるある女性の動向が紹介され、興味深い。

この記事は「クキーン嬢の姿が突然かき消す如くなくなつた」という小見出しをつけている。本宅を神戸の中心、裏山の中腹あたりに持つこの令嬢は、ゴルフリンクでもひととき目立って美しい人であったが、数年前のある日からいなくなってしまったというのである。「この女王様は突如、極めて突然！ 魔女の如く姿を消してしまったのである、神戸にも関西にも、関東にも、いない、日本にも世界の何れの国にも彼女の姿は見いだせないであろう、死んだのであ

²⁸ 無声映画であれば、方言の問題も弁士側の課題となる。

本研究は JSPS 科研費 JP 15K02281 の助成を受けたものである。

ろうか？ そうではない、結婚したのであるか？ 勿論そうでもない」。

女性が姿を消したことに対し、この記事は悲惨な未来を予想するのではなく、「女王」、「魔女」と言った言葉使って、その可能性を強調する。

「明眸禍」の珠子も、ある日突然姿を消す。親や夫や親戚から離れ、珠子が一人で自分の道を切り開いていこうとする強さは、この新聞記事が描いたような女性像につながるところがある。菊池寛が「明眸禍」を書くにあたって、神戸の取材をどのようにしていたのかは不明であるが、作品内に「大阪朝日 神戸版」が登場することから見ても、新聞の地方版を熟読していたであろうことは推測できる。

8. 終わりに

以上、菊池寛の作品に注目し、1928・1929年の「神戸版」に掲載された記事から、当時の神戸での劇場・映画作品の動向を調査した。1930年代から本格的に始まるトーキーの時代を前にして、神戸の映画界が日々模索する様子を読み取れたと思う。洋画専用の劇場を複数持ち、常に新しい技術を進んで取り入れてきた神戸がトーキーについて積極的になるのは当然のことと思われる。だが、娯楽としての側面に注目すれば、〈語り〉の文化に慣れ親しんできた大衆がこれまでの芸術様式を支持する動きも強く、特に多くの労働者とその家族を対象に発展してきた新開地の興行は複数の路線を選択するに至った。菊池寛の作品はその中で、一度は進取性を取りながらもそれに成功せず、結果的には従来の方法を継続していくことになった。それが、菊池寛の望むところであったかどうかは、彼が大映の初代社長として映画興行に取り組む時代に持ち越されていくことになる。